

論文

レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」と中世美術 —聖具室扉絵における写本挿絵等の参照を中心に—

吉岡 泰子*

はじめに

レオナルド・フジタ（藤田嗣治 1886-1968）は、第一次世界大戦終結後のパリで「乳白色の下地」の裸婦像を描き、エコール・ド・パリの寵児として世界に名をはせた画家である。1930年代に日本に帰国し、太平洋戦争下では迫真的な戦争記録画を大量に描いて、日本画壇での地位を盤石なものにした。しかし、敗戦によって日本画壇への失望を胸に1949年日本を去り、アメリカを経て1950年パリに戻った。その後1955年にフランス国籍を取得し1959年にはカトリックの洗礼を受け日系フランス人画家レオナルド・フジタとして活躍した。1968年に亡くなるまでついに日本に帰ることはなかった【資料1】。

晩年のフジタは、具象画の巨匠として子どもや母子像を描く一方、カトリックへの入信を動機付けとして宗教画を多数手がけた。さらに、礼拝堂を自分の宗教画で装飾しようと構想し、多数の油彩による宗教画を制作していた。そして1961年、パリ郊外のヴィリエル・バクルに住まいとアトリエを移した後は、もっぱら「マドンナ（聖母）のための礼拝堂」建設に向けて着々と準備を進めた。

しかし、ランスにある実際に出来上がった「平和の聖母礼拝堂」（1966）は、フジタの最初にして最後の挑戦となったフレスコ壁画（約100㎡）によって装飾された、ネオ・ロマネスク様式の礼拝堂であった。「平和の聖母礼拝堂」（フジタ・チャペルとも呼ばれる）は、イタリア・ルネサンスや北方ルネサンス、フランドル絵画に親和性を持つフジタの個人様式の集大成であることは確かだが、同時に中世の宗教美術からの影響を色濃く反映している。その影響はネオ・ロマネスク様式の礼拝堂の建物にとどまらず、内部の装飾にも及んでいることを検証することが本論のねらいである。

ここでは特に、堂内いっばいに展開するフレスコ画やステンドグラスに隠れて目

* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程後期1年次

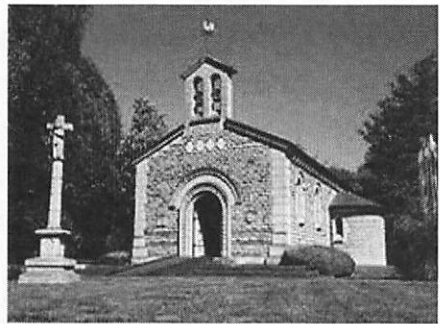
が届きにくかった、聖具室入り口の16枚の小さな板絵に注目した。本板絵に関しては、礼拝堂を管理するランス市美術館のマリー・エレーヌ=モントゥ=リシャルド学芸員による論文「フジタ、永遠の生のためのデッサン」他の中で触れられているものの、詳細な論文はこれまでなかった。本論では、先行研究の内容を検証しつつ、さらに参照源を探ってみた¹。

第1章 「平和の聖母礼拝堂」の概要

1節 ネオ・ロマネスク様式の礼拝堂とエクステリア

この礼拝堂は、フジタ自身の描いたエスキースやマケットをもとに、全てフジタの意向に沿って建築家モーリス・クロジェによって設計、施工された。以前からのパトロンであり、受洗の代父でもあったランスのシャンパン会社社長ルネ・ラルーの支援を得て建てられた²。

北向きのラテン十字型で単身廊、副祭室が二つと聖具室が付いた、三つ葉型の小規模な礼拝堂で、ネオ・ロマネスク様式の石造聖堂である。扉の繊細な鉄製装飾³、二つの鐘のついた鐘楼と風見鶏、庭にはカルベール（十字架）、門扉もある瀟洒な仕上がりである【図1】。



【図1】

ファサードの浅浮彫りは、キリストの象徴である魚にフジタの好んだ人魚や貝殻をあしらった双魚宮と犠牲の子羊で、扉口の左右に設置されている。上部には四つの十字架も彫刻されている。とくに扉口はロマネスク聖堂でよく見かけるシェヴロンや銃眼雷紋などの幾何学的な模様が施され、レースのように繊細かつ簡素で美しい。前庭の石造のカルベールは、旅先で見たブルターニュ地方のカルベールに感銘を受けたフジタが、自分の礼拝堂にも設置しようとかねてから考えてきたものだが、痛々しい磔刑像をさげ、着衣の少年キリストが立っている姿に工夫された。

フジタの礼拝堂は、いくつかの先行研究⁴の中でその着想源とされる、ブルターニュ地方のゴシック様式が色濃く感じられる聖堂との共通点が必ずしも多いとはいえない。設計図や外観からは、フジタが建設の前々年1964年に友人の画家田淵安一⁵と訪問した、オルレアン近郊のモントワール・シュル・ロワールにあるサン・ジル聖堂のプランの、単身廊、三つ葉型、窓が小さく壁が厚いロマネスク様式の特徴との共通性も強く感じられる⁶。規模はフジタの礼拝堂のほうがやや小規模だが、後陣の半円形

の外観もよく似通っている。

フジタは見学した多くの聖堂⁷から、自分の気に入った構造や意匠を取り入れてマケットを複数制作し、エスキースを描いた。特に、フランスの鄙びた小さなロマネスク聖堂は、自分の礼拝堂の具体的な設計をする際大いに参考になったと考えられる。フジタは自分の礼拝堂は「古いと言われてもいいからクラシックなものにしたい。」と日記に書き⁸、そのようなフジタの意向を十分にくみ取った設計者クロジェの専門家としての提案も受けながら、二人三脚で好みに合った伝統的な礼拝堂を建設した。

2節 内部装飾

オルレアン近郊のロマネスク聖堂の見学⁹は、外観以上に内装にも影響を及ぼしていると考えられる。1950年代には既に、オルレアンにほど近い、ロワール河の支流ル・ロワール流域に残るロマネスク聖堂は、フレスコ壁画が比較的多く残っていることで有名だった¹⁰。フジタのロマネスク聖堂見学の目的の一つには、画家として、堂内の壁画を見たいという考えがあったに違いない。この訪問の後に、フジタは田淵の協力を得ながらフレスコ画の研究と技法の習得を開始し、ヴィリエール・バクルのアトリエの壁に、聖母子と取り巻く信者たち、大きなキリストの磔刑図を描いた。

そして、フジタは礼拝堂の建設にあたって設計者のクロジェに「あなたが設計したロマネスク風の礼拝堂の中で、キリスト教の信仰の本質に分ちがたく結びついた私のフレスコ画が後世まで残る、そんな風に思い描いているのです。」と手紙で訴えている¹¹。フジタは礼拝堂の天井と壁面下半分を除いた聖堂内の壁全てを聖母子像、キリスト伝、聖人伝、旧約聖書やヨハネの黙示録他のフレスコ画とステンドグラス、板絵で覆っているが、このコンセプトは、ロマネスク期の小規模な聖堂における堂内装飾のある種の型を受け継いでいるのではないだろうか。

フレスコ壁画の他、ステンドグラス、聖具室扉板絵もすべてフジタの作品であるが、ステンドグラスは、フジタの下絵をもとにランスのステンドグラス職人、アトリエ・シモンとシャルル・マルク親方に委託し、仕上げにはフジタも関わった。同じように、祭壇等の彫刻には石工組合の職人、フレスコ画の下地には左官職人が関わっている。フレスコ画の完



【図2】

成時に、フジタは主祭壇の左下に寄進者としてルネ・ラルーと自分の名前を、その下に設計者や協力者、全ての職人の名前を書いた巻物を描きこんだ。聖堂建設にかかわった人たちへの感謝と共に、職人集団への尊敬の気持ちが表れているとって差し支えないだろう【図2】。

第2章 聖具室扉板絵

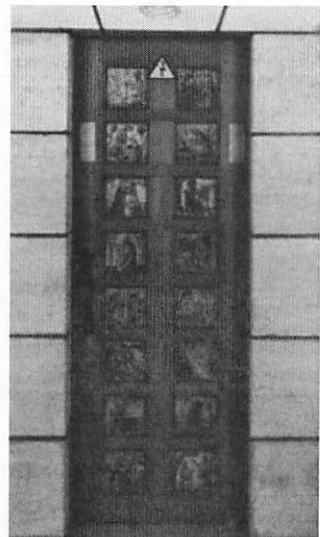
1節 板絵に着目した経緯

「平和の聖母礼拝堂」の聖具室扉絵は小さく繊細な16枚の板絵で構成されている。現場では保存のためか扉の表面にアクリル板のカバーが取り付けられているため、細かい部分がよく観察できない。写真撮影もアクリル板の反射でなかなか難しい。この板絵については、前出のようにランス市美術館のリシャール学芸員による論文¹²の中で触れられている。しかし、各板絵の詳細、その参照源についてさらに調査したいと考え、2019年1月末に訪問の許可を得て、16枚の板絵の図版資料をご提供いただくと共に、同美術館が所蔵する下絵デッサンのオリジナルを調査、撮影をさせていただいた。2017年にフジタの遺族からの寄贈品として礼拝堂に関するデッサンを含め多くの資料がランス美術館に収蔵されていたが、そのカタログも2018年に発刊された。

それらの資料と国立近代美術館アートライブラリ収蔵の藤田嗣治旧蔵書、東京藝術大学大学美術館収蔵の藤田嗣治資料をもとに、聖具室扉板絵の発想と制作過程、参照源について、とくに中世キリスト教美術との関連について考察した。

2節 設置場所と内容、制作過程

聖具室扉(200 cm×70 cm)は礼拝堂の西側奥、主祭壇に向かって左手にあり、扉と板絵は思いのほか小さい(図3)。16枚(各18 cm×18 cm、木板、ガッシュ又は油絵)が2列で縦長にフジタの指示書通りに名前と順番が指定されている。1段目左から《二人の教父》《聖ペテロと聖アンデレ》、2段目《聖ヨハネの説教と洗礼》《アッシジの聖フランチェスコ》、3段目《マリアのエリザベツ訪問》《聖グレゴリウス》、4段目《モーセ》《砂漠の聖ヨハネ》、5段目《黄道十二宮》《聖ヒエロニムス》、6段目《預言者エリア》《聖バジル》、7段目《聖パ



【図3】

タラの殉教》《聖トマス》、8 段目《聖マルティヌスと貧者》《女性の治癒》である【資料2】。全ての板絵にタイトルとフジタのサインが入っている【図3】。

新版の見学者用ガイドブックは、「これらの作品には献身、知識の伝達、他者への愛など、当時フジタが好んだ主題をみることができる」とし¹³、さらにその主題については、「1 段目は、教父と 12 使徒の伝道、2 段目は大聖人とその伝道、3 段目はキリスト教の教義にかかわる重要な人物、4 段目は砂漠と旧約の預言者、5 段目は宇宙と動物譚、6 段目は東方の預言者と大聖人、7 段目は殉教聖人、8 段目は貧者への愛と奇跡である」とする。確かに、描かれた人物は、それぞれの段で互いに内側に向きあい、左右での関連性を示すように調和し、まとまりを感じさせるよう工夫がなされているという【資料2】。

その分類では、教父1、預言者2、聖人10、マリア伝1、奇跡1、黄道十二宮1で、キリスト教の偉人と聖人が圧倒的に多い。これも、中世に聖人崇敬が盛んで聖堂が聖人に捧げられ、聖堂内にずらりと聖人像が並んでいる情景を見たフジタが、自分の礼拝堂のステンドグラスにゆかりの聖人を描き¹⁴、さらに板絵にも取り入れたのではないだろうか。

1966 年3月礼拝堂の建設が進み、ステンドグラスの制作やフレスコ画の研究、キリストの顔など下絵のデッサン作成が佳境に入ってきたころの日記に以下のような記載がある¹⁵。

3月21日

小箱板16枚届く。板の周囲残すか、裏も書くのか？問い合わせだす。

早速、扉の画 guache でかいて三枚仕上げて見た。また一ツ仕事が出来た 面白し。

3月22日

午後は扉サリレスチーの絵十六枚の続き今日もかき昨日と今日とで四枚出来た

思ったより渋し。①枚だけ。

3月23日

今日も扉の絵③枚仕上げた。一日かかった。

3月24日

受 Clousier(礼拝堂設計者)寸法板扉□かいて来た。今日も扉え③枚かく 一日アトリエ仕事 今日で拾枚出来た。

3月25日

午後扉絵又せい出して③枚かく もう後3枚で16枚 かきたくても夜となり・・・

3月26日

今日も扉絵③まいかいて合計16枚完成 ホットして裏地不必要なれども私の好みで色いろいろ変えて下地ぬって・・・ 扉の裏面に型オイテ仕上げる(ばかり)

3月27日

午後仕事して扉絵表も裏の模様も仕上げニスぬって筆洗って□仕事終わった。一ツこれですんだ。

3月28日

厚いニスを扉絵の上にぬる。・・・画室大机の上かたづけて素描等口巻き直したり整理したり・・・

() は筆者補足、□は判読できなかった文字である。

この後はステンドグラスの仕事に戻っている。どの日に何を書いたのか、いつ下絵を作成したのかが不明であるが、1週間で板絵16枚を仕上げた様子が見える。

作品と下絵デッサンを比較してみると、下絵はフレスコ壁画の下絵同様、うすい紙にはほぼ原寸大で主として人物像を簡単に素描し、必ず鉛筆書きでタイトルが書かれ一部のものには出典も添えられている。背景は一部を除いて厳密には準備されず、板絵作成の際に付け加えられたものがほとんどである。また、鉛筆で紙の裏を黒くしてあり転写した可能性を示す。他に2枚スケッチがあるもの、裏にほかの動物を落書きしたのものもある。さらに本番の段階で下絵と構図が変更されたものもあり、資料などを見ながら同時進行で作成したように見受けられる。

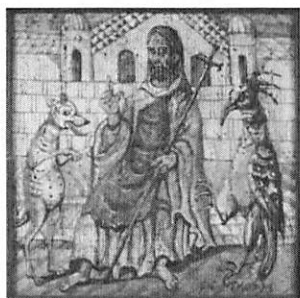
板絵は自由な筆致で独特のユーモアが感じられ、古色を出したマットな仕上げだがよく見ると丁寧に細部まで描きこんだ作品である。

3節 写本挿絵等の参照が見られた板絵

先に挙げたりシャール学芸員の論文にも指摘されているが、「《聖トマス》のように……これらの題材は写本装飾に想を得ている有名なモチーフが多いが、《聖パタラ》のように説話の出所がはっきりしないものもある」¹⁶。また、写本挿絵の他に、聖堂の天井板絵やロマネスク期のフレスコ壁画、さらにはルネサンスの巨匠による作品からの影響も感知される。

完成作品と下絵を見比べて、写本挿絵等の由来が分かりやすいものについて以下述べる。

1 《聖トマス》【図4】



【図4】 板絵



下絵



写本挿絵

フジタが準備した下絵の左上に小さく書かれた文字 *Lectionnaire/tio/de St. Martial* からその参照源が写本挿絵である事はすでに自明であったが、写本名が異なっていた。正しくは、聖句集 (*Lectionnaire*) ではなく聖人伝 (*Legendarium*) で、10世紀のリモージュで制作された有名な聖人伝写本挿絵であろう¹⁷。フジタは、その写本の中の聖トマスと狐と鳥で装飾されたイニシアル文字Bを分解し、動物を聖トマスの両側に立たせた下絵を描いた。舌を出した狐と片足をあげた鳥は写本挿絵の雰囲気をよく残しており、ユーモアあふれる作品に仕上がった。さらに背景には二つの塔のあるロマネスク聖堂と壁をそえたが、ドームのついた塔や瓦の表現が特徴的な屋根の聖堂は、この写本挿絵が紹介されている本の中にあった異なる写本挿絵からヒントを得たものである¹⁸。縦の区切りが2本線の壁は中世写本などに散見されるため、フジタが他の参考資料からとったと考えられる。

2 《聖グレゴリウス》【図5】



【図5】 板絵



下絵



写本挿絵

リシャール氏の最新の論文¹⁹によれば、「《聖グレゴリウス》」の中の所見台は、イザベル・デ・ポルトゥガル所有の聖句集扉面に描かれた『虚ろなる愉悦の禁欲 (Mortifiement de Vaine Plaisantce)』を書くルネ・ダンジューの所見台を真っ先に想起する²⁰。確かに下絵の右上部にルネ・ダンジューと書かれている。当該写本の扉絵と見比べてみると、下絵の段階では所見台以外にも椅子や人物像もかなり似ていることがわかる。

15世紀、中世末期のアンジュー公、ルネ・ダンジューは「善良王」とも呼ばれ芸術の信奉者でもあり、フジタの晩年の後援者、同名のルネ・ラルーを想起させるに十分な人物である。フジタは当初この板絵を、ルネ・ラルーを念頭において作成しようとしたのだろうか。しかし、神の言葉を伝える聖霊の鳩に向かって振りむくポーズの大聖人、聖グレゴリウスに服装と名前を変えた。聖霊の鳩は登場せず、背景はロマネスクの柱と半円アーチで、フジタが好んで多用する市松模様の床の上に粗末な椅子を置き人物を配置した。そして、自分の信奉する聖母マリアのエリザベツ訪問と並べた。写本挿絵からは特徴的な所見台と敬愛すべき二人のルネのダブルイメージが借用された。下絵も丁寧で気持ちのこもった作品である。

3 《聖ヨハネの洗礼と説教》【図6】



【図6】 板絵



下絵



写本挿絵

下絵には「聖ヨハネの説教と洗礼」と書かれている。この作品は、下画も、完成した板絵もアングロ・ノルマンの「ヨハネの黙示録」写本挿絵²¹に酷似している。洗礼槽が木製の樽である点、ヨハネは左手に経典、右手を受洗者の頭に置き、片足を前に踏み出し体を前に傾けたポーズが写本と酷似している。髪の毛の長い受洗者がオランスのポーズで洗礼槽に半身を沈めているのも同様である。以上からみてこの写本挿絵からの転用であるといえるだろう。写本挿絵の洗礼を受けている人物は女性であり、当該「ヨハネの黙示録」写本中の福音書記者ヨハネ伝に出てくる受洗者ドルシネアであろ

う。フジタの下絵では同じく女性として描かれ、板絵では若い男性にも見える。さらにフジタは聖堂内での出来事を、中世写本やフレスコ壁画によく見られる特徴的な形状の樹木のある屋外での出来事に置きかえている。

このアングロ・ノルマンの「ヨハネの黙示録」写本の中には他にも多くの美しい挿絵が描かれている。詳細に見比べてみたところ、《聖パタラ》への参照を感じさせる殉教図のほか、衣のドレーパリーの表現などに板絵だけでなく礼拝堂内のフレスコ壁画への影響がうかがえて興味深い²²。しかし、同写本の他の挿絵をフジタが見ていたかどうかは、現在のところ想像の域を出ない。

4 《女性の治癒》【図7】



【図7】 板絵

下絵

写本挿絵

女性の治癒は奇跡譚の中でも人気のあるテーマであるが、この板絵の元になった聖人はアンジェの聖オーバンである。この作品は極彩色の挿絵が多い写本『アンジェの聖オーバンの生涯』²³中の「聖オーバンが女性の悪魔祓いをする」から引用したものであろう。写本挿絵を見ると女性と聖オーバンの間にいる小さな悪魔が聖人に何か言い訳をしているように見える。立った女性は両手を広げたオランズのポーズで聖人を見つめ、真剣な顔の聖人が祝福を与えている。背景は聖堂内で、美しく装飾された柱やカーテンが描かれ屋外の建物も見える。

フジタの下絵では、女性が聖人の前で両手を広げてひざまずき、悪魔は聖人の前でじたばたしているように見える。背景はカーテンだけになっている。完成した板絵では、悪魔は省略され、人物二人の衣服も簡素化されニプスのない聖人は穏やかな表情で、一般的な《女性の治癒》という題名に則したものになっている。背景も室内から独特な形の樹木の生えた屋外に変わった。テーマは聖人伝というよりも一般的な奇跡譚の一つとしての女性の治癒になっている。

5 《砂漠の聖ヨハネ》【図8】



【図8】 板絵

下絵

フレスコ壁画

写本挿絵ではなく、中世のフレスコ壁画からの転用がはっきり見られたものも見つかった。

本板絵は、左下の植物のような形状のものが何であるか、このヨハネは「洗礼者ヨハネ」なのか、「福音書記者ヨハネ」なのか、植物を食べようとしているのか等の判断がつかかねていたが、そっくりのフレスコ壁画がフジタの旧蔵書から見つかった²⁴。このフレスコ壁画はオーストリア、スティリア州にあるゼッカウ修道院聖堂の壁に描かれた「砂漠の洗礼者ヨハネ」である。砂漠で修業する裸足で粗末な衣をまとった聖ヨハネが、両手で植物をむしって口に運び、飢えをしのいでいる。両脇に見える古代風の柱は、フレスコ画では隣に描かれた別の聖人との区分けに描かれた柱であろう。フジタの下絵、板絵ともそのフレスコ画を反転させ、柱頭彫刻のあるどっしりとした柱にした以外、ほぼそっくりであることがわかる。

6 《聖ペテロと聖アンドレ》【図9】



【図9】 板絵

下絵

フレスコ壁画

この板絵の参照源となったものも写本挿絵ではない。バルセロナのカタルーニャ美術館に所蔵されている、旧セウ・デ・ウルジェイのアプシス壁画左下部に描かれた「鍵を持つ聖ペテロと十字架を持つ聖アンドレ」のフレスコ壁画である²⁵。

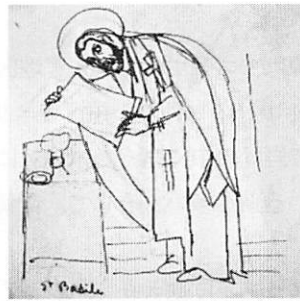
下絵では、座った姿勢になり聖アンドレの十字架の傾きが逆になっているものの、あとはおおむね踏襲し、二人が何か話し合っている雰囲気が伝わってくる。

板絵では、まとった衣が質素で衣のドレーパリーの描き方も参照源とは全く異なる。そのまま写したのではなく、ニンブスはあるがフジタの聖人に対するとらえ方の違いが板絵に表れている。背景は、半室内で後ろに見えるのは聖堂の回廊であろうか。床は頻繁に描かれる市松模様である。

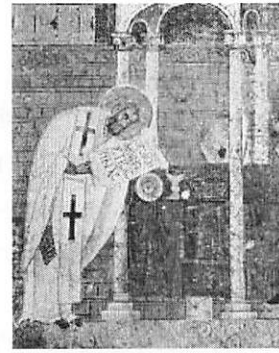
7 《聖バジル》【図10】



【図10】 板絵



下絵



フレスコ画

板絵《聖バジル》の元となった画は、北マケドニア、オフリドにあるビザンティン様式の聖ソフィア聖堂内フレスコ壁画「聖バシレイオス（バジル）のミサ」（1056年以前）である²⁶。聖バジルは三成聖者に数えられ、キリスト教の聖体礼儀を整え典礼書の集収と整理を行った教会博士である。通常直立不動の画が多いが、このフレスコ画は聖バジルが身をかがめて典礼書を視ている珍しい構図である。

フジタはこのフレスコ画の聖バジルを反転させかつ焦点を当てた。聖人の表情や祭服、典礼書のギリシャ語とみられる文字、さらに青い祭壇覆いや祭具等を丁寧に引用している。さらにあえて遠近法を無視した背景描写でビザンティン風に仕上げている。

8 《預言者エリア》【図11】



【図11】 板絵

下絵

フレスコ壁画

《預言者エリア》の参照源は、コソボ・セルビア地区、グラチャニカにある正教会修道院のフレスコ壁画（1321頃）の「砂漠の預言者エリア」であろう²⁷。東方正教会では、赤いマントを羽織って岩屋の中に座ったエリアにカラスが舞い降り、エリアは髭に手を添えて考えこんでいる画が多い。そして、背景には段丘状の特徴的な奇岩や山岳が描かれている。

フジタの下絵は元のフレスコ画を反転させ、パンをくわえたカラスはぐっと接近している。ニンプスはなく、足を組ませ衣も変えてあるが構図は同じといえる。板絵のカラスはまさにパンをエリアに渡そうとしており、エリアは俯に落ちめ顔で髭に手を添えてカラスとパンを見ている。

第3章 聖具室扉板絵の全体構想と参照源

1節 板絵の背景の参照

ほとんどの板絵に、中世美術に特徴的な建物やビザンティン風の洞穴や岩山、ロマネスク特有の怪物を彫刻した柱頭を持つ柱、半円アーチ、プリミティブな表現の草木や、唐草文様が背景に描きこまれている。

例えば、《預言者エリア》や《アッシジの聖フランチェスコ》《聖パタラ》の背景には段丘状の特徴的な奇岩、山岳がみられる。この独特な洞穴や背景の奇岩、山岳は中世絵画やフレスコ壁画にもよく見かけるビザンティン絵画様式をくむものであろう。さらに《聖ヒエロニムス》《女性の治癒》《聖ヨハネの説教と洗礼》《アッシジの聖フランチェスコ》《砂漠のヨハネ》等の屋外描写に見られる樹木等は、写実的に表現しないロマネスク期の自然描写を反映しているであろう。

また、《聖パタラ》《聖トマス》《聖マルティヌスと貧者》等の屋外の建物や屋根の瓦

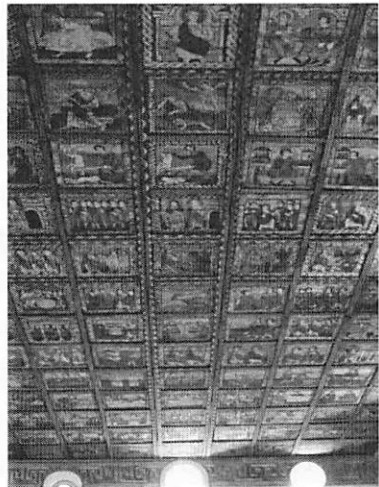
の影のつけ方、壁の表現等は同じく、中世写本挿絵やフレスコ壁画にしばしば見かける表現である。最後に《聖パウル》《二人の教父》、《モーセ》《聖ペテロと聖アンドレ》《聖グレゴリウス》等の背景は室内、半室内の情景だが、聖堂内の列柱、アーケード、奇怪な柱頭を持つ柱、回廊などもロマネスク期のモチーフとあって差し支えないだろう。

例外的な背景として、《マリアのエリザベツ訪問》の唐草模様、《黄道十二宮》の海の情景がある【資料2】。

2節 発想源としてのツィリス天井画【図12】

扉板絵の発想源として、スイス、ツィリスにあるザンクト・マルティン聖堂の天井画があると筆者は考える。この天井画は12世紀制作の153枚（90cm角、9×17枚）の板絵で構成され、98枚のキリスト伝と聖マルティヌス伝の板絵を、四つの風の象徴である天使と、半魚半獣や鳥、セイレーン（人魚）など空想上の生き物で取り囲んでいる【図12】。

その中に、下半身が二股で音楽を奏でるセイレーン、二股のユニコーンと獅子の頭を持つ半魚半獣がいるが、これらの架空の生き物から、フジタは聖堂によく描かれた《黄道十二宮》を連想したのであろう。



【図12】

フジタの板絵では、セイレーンがホタテ貝に乗ったヴィーナスの様な「おとめ座」に、二股のユニコーンと獅子は、おとめを襲う様に取り囲む星座伝説の海獣になっているようだ。

さらに「キリスト伝」の中から、エリザベツ訪問を選んだように見受けられる。マリアとエリザベツが抱擁する構図もロマネスク期の「ご訪問」によくみられる典型的な図像としてとらえられる。また、中世フランスでは聖マルティヌス崇敬が盛んで、貧者への施しは最も有名なエピソードである。フジタの《聖マルティヌスと貧者》は、城門を背景に馬上の聖マルティヌスが、座り込んだ貧者に衣を与えている典型的な構図であるが、ツィリスでは馬と聖マルティヌスは二つの板絵に分かれている。しかし、これも《聖マルティヌスと貧者》を描いた発想源となった可能性があるだろう。

最後に、ツィリスの天井画の縁取りは手の込んだ様々な文様があり美しい。フジタの礼拝堂のステンドグラス《創世記》の縁飾りは模様や扱いがツィリスと似ており、影響を感じさせるに十分である。藤田旧蔵書の中にはツィリスの天井画にふれた本や

カタログが存在し、この板絵を知っていたことは確かだと思われる【資料2、3】。

3節 参照に使われた藤田旧蔵書

以上から、フジタが中世美術に想を得ていることが明確になった。そして、これら中世の図像にどこで触れたかについては、フジタ旧蔵書の中に同じ図像があることから蔵書由来のものが多いと考えられる。現時点では見つからなかった参照源も今後見つかる可能性は大きい。フジタが長年かけて収集してきた蔵書群には、写本挿絵を含む中世の宗教美術に関する本やカタログが相当数含まれている。本稿で紹介した事例はすべてフジタ旧蔵書の中に見つかったものである【資料3】。

別の可能性も1959年3月19日の日記から推察できる。その日記には、当時、著名なカリグラファーや具象、抽象を問わない画家たちと共同制作していた羊皮紙・肉筆挿絵の『黄金の聖書』（ヨハネの黙示録）の取材で、フジタがフランス国立図書館の羊皮紙写本2冊を閲覧したことが記録されている²⁸。そして、パリのフランス国立図書館には、その日に閲覧された写本番号の記録が残っている。『黄金の聖書』の制作状況と照らし合わせるとその2冊は黙示録である可能性が高いが、具体的にフジタがどの写本を閲覧したかは今後の分析で解明されるだろう。

しかし、聖具室扉板絵制作に限って言えば、数年以上前に閲覧した写本挿絵を参照源とするには、少々時間がたちすぎていると感じられる。やはり、より具体的な参照源は身近にある日ごろから研究に使用していた蔵書や写真、絵葉書などであろうか。

このように、フジタは、蔵書や中世の聖堂見学、図書館訪問等を通して、宗教美術の研究を重ね、想を得てキリスト教絵画の制作や礼拝堂の装飾を行い、その内容はロマネスク期までさかのぼることがわかった。

おわりに

フジタの「平和の聖母礼拝堂」建設のねらいは、第一に芸術家として、自分の画業の集大成を示すこと、第二にカトリック信者として、自身の作品で礼拝堂を装飾し聖母マリアに寄進して、自らの贖罪を果たすとともに加護を願い来世に備えることであっただろう。

社会的背景として、20世紀初頭からのフランス国内における宗教の復権運動がある。キリスト教復興のための「聖なる芸術（アール・サクレ）」運動がおこり、ジョルジュ・ルオーやモーリス・ドニラを皮切りに、多くの芸術家が参画した²⁹。また、ゾディア

ック叢書の刊行などロマネスク美術の再評価もブームが続いていた³⁰。フジタも、途中遠ざかった時期があるものの、1913年の渡仏以来宗教画を制作してきた。そして1950年以降は多くの聖堂を訪問し、キリスト教美術を通して芸術的影響のみならず、精神的な啓示を受け自らのカトリック受洗へと繋がっていった。

そのような状況の中で礼拝堂建設にあたったフジタは、第二次大戦後の「アール・サクレ」運動のシンボリックな存在であるアンリ・マティスのロザリオ礼拝堂や、ミイラ・フォレにあるジャン・コクトーのサン・ブレース・デ・サンプル礼拝堂を意識して訪問していたことが日記からわかる³¹。

しかし、フジタは「アール・サクレ」運動のような現代的な宗教美術振興の中で建設されたモダンな聖堂の建立は望んでいなかった。中世に回帰する、ロマネスク期の古典技法や図像を駆使した小さな礼拝堂の建設を熱望した。そして、そのようなコンセプトが聖堂の片隅にある聖具室扉の装飾にまでいきわたった礼拝堂が完成したのだ。

板絵自体の作風は民衆芸術的な素朴で個性的なものであり、1950年代後半からフジタが住んでいたパリ、カンパーニュ＝プルミエール通りのアトリエにあった、スペイン製扉や壁にはめ込まれた子ども達のパネル画³²も想起させる。フジタの真骨頂である細かい手仕事の作品で礼拝堂を装飾する事は、民衆芸術に興味を持ち手仕事の作品も多数残したフジタの多才さを示している。また、フジタ自身の「画業の集大成」としての「平和の聖母礼拝堂」建設の趣旨にも合致している。隅々まで手を抜かずに礼拝堂を自分の作品で埋め尽くして、聖母マリアに献納するという考えを全うしたフジタの思いが凝集されているといえるだろう。


【資料1】 藤田嗣治（レオナルド・フジタ）略年表

	フジタの動向	世界・フランス・日本の動向他
1886年 明治19年	11月、現在の東京都新宿区に生まれる。	
1910年 明治43年	東京美術学校西洋絵画科卒業	
1913年 大正02年	渡仏 戦時下のパリに残り苦学する。	1914年第一次世界大戦勃発
1921年 大正10年	サロンドートヌヌに「乳白色の大地」の《裸婦》を発表し称賛を受ける。	1919年ヴェルサイユ条約、アトリエ・ダール・サクレの活動
1925年 大正14年	レジオン・ドヌール勲章等受章し、エコール・ド・パリの寵児となる。	
1931年 昭和6年	フランスを出発し中南米を経て2年後日本に戻る。壁画を多く描く。	1929年世界大恐慌 1937年パリ万博
1939年 昭和14年	再渡仏するが、パリにドイツ軍が迫り、帰国する。	第二次世界大戦勃発、翌年パリ陥落 「アール・サクレ」運動停止
1941年 昭和16年	このころから、戦争記録画を積極的に制作し始める。	太平洋戦争勃発
1943年 昭和18年	《アッツ島玉砕》他多くの戦争画を描く。	
1945年 昭和20年	終戦後、日本画壇との軋轢で苦しむ。	8月終戦
1949年 昭和24年	日本画壇への失望を胸にアメリカに向かい、翌年フランスに入国。	1950年「アール・サクレ」運動再興 1951年マティス、ロザリオ礼拝堂再建
1955年 昭和30年	フランス国籍取得 1957年オフィシエ・レジオンドヌ	ゾディアック叢書創刊 ル・コルビジユエ、ロンシャン礼

	ール勲章	拝堂完成
1959年 昭和34年	カトリックに改宗 豪華本『黄金の聖書』制作に参画する。	コクトー、サン・ブレーズ・デ・サンプル礼拝堂改修
1961年 昭和36年	第一回「トリエステ国際宗教美術展」金賞 ヴィリエール・バクルに引っ越す。	世界で原水爆実験への脅威が高まる。 1964年東京オリンピック 日本でもロマネスク紹介本出版
1966年 昭和41年	10月平和の聖母礼拝堂 完成、落成式 以後、入退院を繰り返す。	
1968年 昭和43年	1月、チューリッにて死去（享年81）	

【資料2】 板絵とその参照 一覧

作品名・参照	左の板絵	右の板絵	作品名・参照	段
《二人の教父》			《聖ペテロと聖アンドレ》スペイン「アブサイド・セウ・ド・ウルジェル」フレスコ壁画	1
《聖ヨハネの説教と洗礼》 アングロ・ノルマン 『ヨハネの黙示録』 写本挿絵			《アッシジの聖フランチェスコ》 服装等『聖人伝辞典』の挿絵 初期ルネサンス壁画	2
《マリアのエリザベツ訪問》 ツィリス天井板絵や、ロマネスク壁画、絵画			《聖グレゴリウス》 ルネ・ダンジューを描いた写本挿絵	3

《モーゼ》 ルネサンス彫刻、絵画			《砂漠の聖ヨハネ》 オーストリア・ステイリアゼッカウ修道院聖堂フレスコ壁画	4
《黄道十二宮》 ツィリスの天井板絵やルネサンス絵画			《聖ヒエロニムス》	5
《預言者エリア》 コソボ・セルビア、グラチャニカ正教会修道院フレスコ壁画「砂漠の預言者エリア」			《聖バジル》 北マケドニア・オフリド聖ソフィア聖堂、フレスコ壁画「聖バシレイオス(バジル)のミサ」	6
《聖パタラの殉教》			《聖トマス》 『リモージュの聖人伝』写本挿絵、『聖オーガスティン』写本挿絵	7
《聖マルティヌスと貧者》 ツィリス天井板絵			《女性の治癒》 アンジェの『聖オーバンの生涯』写本挿絵	8

*未確認は空欄。15世紀絵画、ルネサンス彫刻や絵画等の参照については一覧表にのみ記載。

【資料3】 現時点で板絵参照源の図像が確認された藤田旧蔵書一覧

請求番号	書名	出版社、出版年	関連する板絵
Fujita B4y 124	Les manuscrits à peintures Le livre-musee:7 『描かれた写本』	Pont Royal 1964	《聖ヨハネの説教と洗礼》《聖グレゴリウス》 背景の建築物、植

			物 聖堂内フレスコ画
Foujita B4y 43	La peinture française du quinzieme siècle 『15 世紀のフランス絵 画』	par Grete Ring London Phaidon 1949	《聖グレゴリウ ス》 アンジュのルネ
Foujita B4y 196	Suisse romane 『スイス・ ローマン』 La nuit des temps:8	Zodiaque 1958	《黄道十二宮》 ツィリスの天井板 絵
Foujita B4y 204	Limousin roman 『リムー ザン・ローマン』 La nuit des temps:11	Zodiaque 1960	《聖トマス》
Foujita B4y 104	L'enluminure française 『フランスの彩色挿絵』	JeanPorcher Paris Arts et metiers graphiques 1959	《聖トマス》、 背景の建物 聖堂内フレスコ画
Foujita B4y 198	Anjou roman 『アンジュ ー・ローマン』 La nuit des temps:9	Zodiaque 1959	《女性の治癒》
LFoujita B4y 127	Autriche : peintures murales du moyen âge (Collection Unesco de l'art mondial) 『オーストリア : 中世の 壁画』	New York Graphic Society en accord avecl'Unesco c1964	《砂漠の聖ヨハ ネ》
Foujita B4y 118	La peinture romane (Le livre-musee:5) 『ローマン絵画』	Editions du Pont Royal 1963	《聖ペテロと聖ア ンドレ》 ツィリス天井板 絵、 ご訪問 背景の建物、山岳 風景等
Foujita	Dictionnaire	Societe d'edition	《聖フランチェス

B4y 211	historique des Saints 『聖人歴史辞典』	de dictionnaireet encyclopedies 1964	コ》 《聖バジル》 肖像、典礼儀式
Foujita B4y 83	La Bible dans l'art : un choix des plus belles oeuvres peintures, sculptures, dessins et miniatures inspires par l'ancien testament 『美術の中の聖書』	Librairie Stock 1956	《モーゼ》
Foujita B4y 120	Fresques médiévales en Yougoslavie (Le grand art en edition de poche:U6) 『ユーゴスラビアの中世 フレスコ画』	David Talbot Rice [Paris] UNESCO/Flammarion c1963	《聖バジル》 《砂漠のヨハネ》 聖堂内フレスコ画 の背景

図版出典

- ・ 礼拝堂、聖具室扉と板絵の図版は、ランス市美術館から提供していただいた。
- ・ 板絵の下絵は筆者撮影。
- ・ 蔵書からの転写、掲載は、国立近代美術館のアーカイブライブラリの許可をいただいた。
- ・ ツィリスの天井画は、東海大学大学院・金沢百枝氏が撮影した写真を提供していただいた。
- ・ 写本挿絵と一部のフレスコ壁画は、所蔵図書館等の公開画像を使用させていただいた。

(最終検索日 2019. 12. 27)

<https://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc64241q>

expositions.bnf.fr/flamands/grand/fla_051.htm

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8447298r/f9.image.r=MS%20Français%20403>

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b105157428/f15.item>

https://www.wikiwand.com/fr/Basile_de_Césarée

参考文献・資料

一次資料

- ・東京藝術大学大学美術館収蔵「藤田嗣治資料」
- ・東京国立近代美術館本館アート・ライブラリ収蔵 藤田嗣治旧蔵書
- ・ランス美術館収蔵 フジタ寄贈品

その他の文献

- ・ランス市美術館編『ランス美術館展カタログ』ランス 2016
- ・Musée des beaux -Art de Reims 『Foujita la donaiton, Catalogue œuvres 』Reims 2018
- ・Musée des beaux -Art de Reims 礼拝堂ガイドブック『ノートル・ダム・ド・ラペ フジタ 礼拝堂 ランス』ランス 2019

註

-
- ¹ 『フジタ、永遠の生のためのデッサン ランス美術館所蔵フジタ贈与作』ランス美術館展カタログ 2015年、27頁
『ランス、ノートルダム・ド・ラ・ペの画家、フジタ』フジタ寄贈品カタログ
ランス市美術館 ランス 2018年、206頁
 - ² フジタは当初自宅近くの村の聖堂を装飾することも考えたが断られると、自分の資金で近くのモントーバンに新たに礼拝堂を建設しようと考えた時期もあった。1961年、ルネ・ラルーに礼拝堂建設の夢を語ったところ、高齢になり社会貢献を考えていたルネ・ラルーの資金面、精神面両面からの支援を受けて、二人で礼拝堂建設に取り組むことに決定した。1961年1月24日付手記「チャペルの夢」藤田嗣治資料FT.00555 現在東京藝術大学美術館所蔵の藤田嗣治資料に日記などと共に含まれている。以下藤田資料。
 - ³ この鋳と鉄製蝶番の打たれた朱色の扉は、フジタがシャルトル大聖堂、南扉口扉の意匠を参照したものであることが、下絵デッサンと1965年12月25日の日記（藤田嗣治資料FT00564）によってわかる。
 - ⁴ 日本での礼拝堂建設に関する先行研究は決して多いとは言えない。近年になってフジタ没後の展覧会が日本でも行われるようになり、論文が発表されるようになった。フランスではランスやヴィリエル・バクルの学芸員による論文やエッセイが発表されている。以下年代順・ピエール・ラドゥエ『仏教からカトリシズムへ—レオナール・藤田—』世紀3月号1963年80頁・山地治代『レオナール=ツグハル・フジタとクリスチャニズム 日本人画家のキリスト教絵画』論文レジュメ 2002年・平和の聖母礼拝堂建設研究会（アンヌ・ル・ディベルティ他）『キリスト教徒フジタとシャペル・ノートル=ダム・ド・ラ・ペ』没後40年レオナール・フジタ展カタログ 北海道近代美術館 2008年188頁～・アンヌ・ル・ディベルティ、ダビット・リオ「平和の継承者」がランスに捧げた遺作—黙示録と楽園の間で解説 FOUJITA MONUMENTAL! ENFER ET PARADIS『藤田モニュメンタル! 天国と地獄』特別展カタログ ラン

ス市美術館 2010年・林洋子『藤田嗣治からレオナルド・フジタへーカトリックへの道行』特集「近代の宗教美術」近代画説第24号2015年、90頁・村上哲『レオナルド・フジタとランスー藤田嗣治をめぐるキリスト教図像の系譜』、カトリーヌ・ドゥロー『藤田とランス』 藤田嗣治展一東と西を結ぶ絵画カタログ 名古屋市美術館、熊本県立美術館他 2016年、129頁、24頁・マリー・エレヌ・モントゥ＝リシャール『フジタ、永遠の生のためのデッサン ランス市美術館所蔵フジタ贈与作品』ランス市美術館展図録 2016年、25頁・カトリーヌ・ドゥロー『フジタ、ランスとキリスト教』、マリー・エレヌ・モントゥ＝リシャール『ランス、ノートルダムドラペ礼拝堂の画家、フジタ』フジタ寄贈品カタログ ランス 2018年、119頁、204頁

三人の研究者が、ブルターニュ地方の聖堂を礼拝堂の外観の着想源の一つとして挙げているが、中にはゴシック期の聖堂も含まれている。礼拝堂建設の動機付けとなったと考えられるという意味ではないだろうか。

- 5 田淵安一(1921-2009) フジタの晩年の日記に頻繁に出てくる家族ぐるみで親交の深かった日本人画家。1952年に渡仏し徐々に抽象表現の画家として頭角を現しヨーロッパと日本で活躍した。渡仏当初はソルボンヌ大学美術考古学研究室に席を置き、各地の中世礼拝堂等を見学するなどし、生涯を通じ北欧やトルコ、インドにまで足をのびして、ヨーロッパ文明の古層に迫った美術史家でもあった。
- 6 田淵とのオルレアン近郊のロマネスク探訪については、フジタの当時の日記にその前後も含めて記載が見られる。藤田資料FT00561「Agenda1964」 参考：拙著『レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」一日記と蔵書で考察する礼拝堂装飾の過程』2018年芸術学研究6京都造形芸術大学芸術学研究室 ISSN 1881-4565
- 7 フジタは上記のオルレアン近郊のロマネスク探訪だけでなく、長年にわたってヨーロッパ各地の聖堂を訪問し、本、カタログ、絵葉書等を収集し自らも写真を撮影した。
- 8 藤田資料FT00564 1965年10月10日の日記
- 9 1964年7月15日の見学では、ラヴァルダン、モントワールのサン・ジル聖堂、サン・ジャック・ド・ゲレ、アレーヌ等を訪問し、帰路にシャルトル大聖堂に寄っている。
- 10 アンジェリコ・シュルシヤン師創刊のゾディアック叢書「La nuit des temps」5『*Poitou romain*』や6『*Touraine romane*』の中に掲載されている、特に壁画のあるロマネスク聖堂をフジタは複数見学している。藤田旧蔵書:Foujita|B4y||184 *Poitou roman (La nuit des temps:5)* Introduction de Rene Crozet/texte d'Yvonne Labande-Mailfert/photographies inédites de G. Franceschi, P. Kill, F. Michel et R.G. Phelifeaux/traduction anglaise de Mistress Pamela larke/traduction allemande de Albert Delfosse[La Pierre-qui-Vire] Zodiaque 1957 :Foujita|B4y||185 *Touraine romane (La nuit des temps:6)* Odilon Aymard ... [et al.]/photographies inédites de R.G. Phelipeaux/traduction allemande de Albert Delfosse/traduction anglaise de Pamela Clarke La Pierre-qui-Vire Zodiaque 1957
- 11 カトリーヌ・ドゥロー「フジタ、ランスとキリスト教」『FOUJITA DONATION』Edition Snoeck, Gand, 2018 Musée des Beaux-Arts de Reims ランス 2018年、200頁によれば、1966年8月12日のユニオン紙上に、フジタが建築家クロジェにあてた書簡が公開されている。
- 12 『フジタ、永遠の生のためのデッサン ランス美術館所蔵フジタ贈与作』ランス美術館展カタログ 2015年、27頁
『ランス、ノートルダム・ド・ラ・ペの画家、フジタ』フジタ寄贈品カタログ ランス市美術館 ランス 2018年、206頁
- 13 『ノートルダム・ド・ラ・ペ フジタ礼拝堂』日本語、フランス語、英語 ランス市美術館 ランス 2019年
- 14 聖レオナルドス、聖ベアトリス、聖マルタ、聖カエキリアのステンドグラスが設置されている。カエキリア以外は、自分と代母の守護聖人だという。
- 15 藤田資料FT080-087
- 16 『フジタ、永遠の生のためのデッサン ランス美術館所蔵フジタ贈与作』ランス美術館展カ

- タログ 2015年、28頁
 なお、聖パトラは『黄金伝説』にも見当たらない。パトラ姓はインドにあるようなので隣のトマスと共にインドゆかりの聖人なのか。今後の課題の一つとしたい。
- ¹⁷ *Legendarium Abbey de Saint-Martin de Limoges*, B.N.F. Paris, Ms. lat. 301, fol. 293r. : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||104 *L'enluminure française* Jean Porcher [Paris] Arts et metiers graphiques 1959 91頁
- ¹⁸ 塔のある聖堂の部分は明らかに以下の写本挿絵、同じ蔵書からの引用とわかる。
SAINT AUGUSTIN ET CHARIST; ALARDUS PRÉSENTE SON LIVRE A SAINT VAAST. Saint Augustin. Confession; Saint-Vaast d' Arras, première moitié du IXe siècle(Arras, manuscript 548, fol. lv.). : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||104 *L'enluminure française* Jean Porcher [Paris] Arts et metiers graphiques 1959 105頁
- ¹⁹ 『ランス、ノートルダム・ド・ラ・ペの画家、フジタ』フジタ寄贈品カタログ
 ランス市美術館 ランス 2018年、206頁
- ²⁰ 「イザベル・デ・ポルトゥガル所有の聖句集」
Le Mortifiement de vaine Plaisance 1455-1458 Bruxelles, Bibliothèque royale Belgique Ms. 10308, fol. 1. : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||124 *Les manuscrits à peintures* Le livre-musee:7 Pont Royal 1964 156頁
- ²¹ *Apocalypse glosée français Anglo-Norman England 1240-1250 AD*. B.N.F. Ms. Français. 403, fol. 1r. : 「Prédication et baptême de saint Jean」 : Ecole de Matthew Paris : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||104 *L'enluminure française* Jean Porcher [Paris] Arts et metiers graphiques 1959 98頁
- ²² 礼拝堂内フレスコ画中の聖母をはじめとする人物の衣は過剰なまでのドレーパリーの表現が特徴的である。フジタの個人様式の一環とも考えられるが、本写本挿絵中の衣の表現と強い共通性が感じられる。
- ²³ *Illustration de la Vie de Saint Aubin d' Anger*, Anger, vers 1100 Paris, BNF. Nal. 1390, fol. 1r. 「Saint Aubin exorcisant une femme」 : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||198 *Anjou roman* (La nuit des temps:9) Pierre d'Herbecourt, Jean Porcher/photographies inédites de R.G. Phelipeaux et P. Belzeaux/traduction anglaise de Pamela Clarke/traduction allemande de Dom Albert Delfosse [La Pierre-qui-Vire (Yonne)] Zodiaque 1959 挿絵 5
- ²⁴ Seckau (Styrie) Eglise abbatiale, transept, mur sud La legend de saint Jean-Baptiste détail: saint Jean dans la désart. Dernier quartdu XIIIe siècle : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||127 *Autriche : peintures murales du moyen âge* (Collection Unesco de l'art mondial) preface, David Talbot Rice/introduction, Walter Frodl [Paris] New York Graphic Society en accord avec l'Unesco c1964 28頁
- ²⁵ *Saint Pierre et Saint Andre*. Provient de L' apside de San Pedro de Seo de Urgel. 12 c.
 Barcelone. Musée d' Art Catalan, barcelone. Peinture Murale déposée sur toile. : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||118 *La peinture romane* (Le livre-musee:5) Juan Ainaud, Andre Held Paris Editions du Pont Royal 1963 122頁
- ²⁶ Ochrid. Sainte-Sophie. Avant 1506 Saint Basile célébrant la messe : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||435 *La peinture française du quinzieme siècle* par Grete Ring London Phaidon [1949] 図 5
- ²⁷ Gracanica. 1321. Le prophète Elie est assis dans sa grotte; le corbeau lui apporte à manger (I Rois XVII, 6) : 藤田旧蔵書 Foujita|B4y||120 *Fresques médiévales en Yougoslavie* (Le grand art en édition de poche:U6) David Talbot Rice [Paris] UNESCO/Flammarion c1963 図 23
- ²⁸ 藤田資料 FT00548
- ²⁹ 「アール・サクレ」運動とは、第一次大戦後のフランスでカトリック教会中心に高まった信仰を喚起する「聖なる芸術」の推進運動である。特に第二次大戦後、雑誌『アール・サク

レ』の編集に携わったドミニコ会のマリ・アラン・クーチュリエ神父の推進する宗教美術のモダニズム化によって、20世紀の宗教美術に多大な影響が及ぼされた。たとえば、アッシーにあるノートル＝ダム＝ドゥ＝トゥット礼拝堂（1950）を皮切りに、アンリ・マティスのヴァンスにあるロザリオ礼拝堂（1951）、ル・コルビュジェのロンシャンにあるノートル＝ダム礼拝堂（1954）などが有名である。アメリカ・ヒューストンにあるロスコ・チャペル（1971）も彼の影響下にあるとされる。

³⁰ 1940年代末から、ベネディクト会修道士アンジェリコ・シュルシャンはロマネスク美術の重要性を説く雑誌『ゾディアック』を発刊した。また、1954年—1999年まで続いたフランスをはじめヨーロッパ各地のロマネスク聖堂などを紹介するゾディアック叢書『ラ・ニユイ・デ・タン（悠久の昔）』のシリーズ本は、広く市民の間で人気を博した。白黒の写真が美しく、20世紀後半におけるロマネスク美術の啓発と流行に寄与した。：金沢百枝「キリスト教美術をたのしむ44」2019年2月28日講演より　：フジタもこのシリーズ本を複数冊所有し、研究に使用している。

³¹ マティスのロザリオ礼拝堂には1964年12月に訪問し、感銘した様子で「写真で見たものとは比べものにならず…」と日記に詳細な記録を残している。また、1965年5月には、「コクトーのお寺（サン・ブレーズ＝デ＝サンプル礼拝堂）友人訪問」と日記にある。その後も、マティスとコクトーの礼拝堂の話は時々日記に記載がある。参考：前出拙著『レオナルド・フジタ「平和の聖母礼拝堂」の関連年表「1964年～1968年」：主に日記による』

³² 《小さな職人たち》（1959）《フランスの富》（1960—61）

謝辞

本論文の執筆にあたり、東京国立近代美術館アートライブラリの方々には大変お世話になりました。

また、フジタ礼拝堂の聖具室板絵資料等の撮影並びにフジタ寄贈品の文書閲覧、情報提供、本論への図版掲載につきまして、ランス市美術館館長のカトリーヌ・ドゥロー氏（Madame Catherine DELOT）よりご許可をいただきました。マリー＝エレヌ・モントウ＝リシャール氏（Madame Marie-Hélène MONTOUT-RICHARD）並びにマクサンス・ジュリアン氏（Monsieur Maxence JULIEN）には、時間を割いて写真撮影や日記等の情報提供に多大なご協力をいただきました。

ここに記して心からお礼を申し上げます。